

【ポスター発表】

**コミュニティソーシャルワーカー配置事業におけるゴールと実践プロセスの検討
ー実践家参画型ワークショップを活用したプログラム評価モデルの構築にむけてー**

○ お茶の水女子大学大学院 佐藤 雅子 (8361)

菱沼 幹男 (日本社会事業大学・3909)、室田 信一 (首都大学東京・6647)、山口 麻衣 (ルーテル学院大学・5165)、大島 巖 (日本社会事業大学・0228)

キーワード：コミュニティソーシャルワーク、実践家参画型ワークショップ、プログラム評価

1. 研究目的

近年、地域福祉の推進に重要な役割を果たすと期待されるコミュニティソーシャルワーカー（以下 CSWer）の配置事業は社会福祉協議会を中心に全国的に展開されてきている。しかし、その配置基準や役割は各々の所属機関で異なり、共通した事業の方向性や評価方法は確立していない現状がある。今後、人的配置の促進のみならず効果的な実践を広く普及させてゆくためには、各実践現場における取り組みの創意工夫を共有・蓄積し、これらの実践を体系化したプログラム評価モデルを構築する必要がある。そこで本研究では、実践家参画型ワークショップで得られた質的データを用いて、所属機関や地域が異なる各地の CSWer に共通するゴールおよび実践プロセスを明らかにする。さらに、プログラム評価の理論と方法をもちいて、ゴール設定とその達成過程を示す「インパクト理論」、また、ゴールを実現するための支援計画となる「サービス利用計画」について検討し、効果的実践モデルを形成するための示唆を得ることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

実践家参画型ワークショップは、ファシリテーター1名、観察者2名、記録者1名の調査者により、2014年3月に実施した。参加者は、異なる地域または所属機関に配置されている指導者レベルのコミュニティソーシャルワーカー8名（男性4名、女性4名）が参加した。ワークショップでは、CSWer が目標としている①ゴールと②実践プロセスの2つのテーマについてそれぞれ議論した。具体的手順は、各テーマについて各自2～3枚のカードを作成し、それぞれの内容を全員で共有した。ファシリテーターは進行役として参加者の意見交換を支援し合意を図りながら、あげられたカードを模造紙に整理した。

分析方法は、録音記録から逐語録を作成し、各テーマであげられたカード、カードの意味内容、他のカードとの関係性に関する会話を抽出した。これらの内容を分析し、ゴールに向かう一連の実践プロセスについて考察した。

3. 倫理的配慮

ワークショップ参加者には、調査者より口頭と文書にて、研究の目的と概要、方法、研

究以外の目的に使用しないこと、学会発表や論文に用いる際には、個人を特定できる情報は使用しないことのプライバシー保持への配慮について説明し、同意書に署名を得た。

4. 研究結果

ワークショップの結果、ゴールに関する13枚のカードがあげられた。これらのカードは、A:【地域住民が安心して暮らせる】、B:【福祉『で』まちづくりをする】、C:【地域自立生活支援】、【制度の狭間ゼロを目指す】、【社会的孤立をなくす】、D:【住民の生活課題解決】、【はざまへの支援・開発】、【福祉コミュニティの創造（福祉のまちづくり）】、E:【地域の福祉力の向上】、F:【住民主体で支え合い】、【どんな相談も受け止められるようになる】、G:【地域福祉志向（意識改革）】、【課題の普遍化】であり、GからAにむかい段階を経て最終的な上位のゴールにたどりつく過程が示された。

また、実践プロセスに関し、24枚のカードがあげられた。ゴールを達成するために重要だと考えられるこれらの取り組みは、大きく分類し、【住民懇談会】、【小地域ネットワーク会議】の開催や【ニーズ調査】、【アウトリーチ】などの実施により「A':地域の課題を把握」する活動、【個別の総合相談】などをおした「B':個別支援」活動、【住民向け研修会】などによる「C':福祉教育」活動、【サロン活動の支援】や【支援活動の組織化】などから発展し新たな仕組みを構築する「D':開発」に関わる活動の4つの領域に整理された。これらの活動は同時並行かつ循環的に行われ、それぞれが複雑に関連し合いゴールにむかって取り組まれているプロセスが明らかになった。

5. 考察

本研究では、対話と合意形成を重視した実践家参画型ワークショップを活用することにより、各々の実践を可視化し、参加者間の共通理解を深めた。さらに、プログラム評価の理論と方法をもちいて、各地の実践で共有されるゴールを見だし、参加者間で合意が得られた一つの実践プロセスを提示した。プログラムに直接携わる実践家が協働してプログラムモデルの形成過程に参加する試みは、現場の創意工夫が反映された実用的かつ実施・普及が容易なプログラム評価モデルの構築に寄与するものと考えられる。このように実践家が有用と考える実践プロセスの事例を積み上げていくことは、よりエビデンスレベルの高いプログラムの構築に重要であると考えられる。また、これらの手法は、業務の現状把握を行い、実践が促進される要素が整理されることから、各現場における事業の方向性やゴール設定にも有用であると考えられた。本研究では実践家の視点に着目した実践プロセスを検討した。今後、これまで蓄積された研究者の知見との擦り合わせ・統合が課題である。

付記)本報告は平成23-26年度科学研究費助成事業(基盤A)「実践家参画型福祉プログラム評価の方法論および評価教育法の開発とその有効性の検証」(代表:大島巖)コミュニティソーシャルワーカー配置プログラム研究班(班員:菱沼幹男、室田信一、山口麻衣、佐藤雅子)の研究成果の一部である。